

「問いづくり」のヒント

「問い」は構造化することができます。その構造を理解していくと、目的に合った問いをつくりやすくなります。ここでは、その方法を3つの手順で説明します。

問いだしの方法と手順

- 1 単元などの「ストーリー」を構想し、「問い」の順番を大小構わず書き出す
- 2 書きだした大小の問いがI・C・Eのいずれのフェーズかを考える
- 3 「疑問詞・接続詞を活用した関係づくり」の表にあてはめて、見直す

1 単元などの「ストーリー」を構想し、「問い」の順番を大小構わず書き出す

「問いの形」を5W1Hでとにかく連想してみる

生徒に身につけさせたい資質・能力や、単元のねらいなどからおおまかな「ストーリー」を考え、そこに至るためにもたくさん問い出しをしてみましょう。このときのポイントは、「問いの形」を5W1Hでとにかく連想してみることです。

例えば、世界史B「産業革命」の授業では、

産業革命は、イギリスの綿工業の分野から18世紀半ばから始まります。アークライトやクロンプトン、カートライトらにより紡績・織布における技術革新が連続しておこるようになり、ワットの改良による蒸気機関は、蒸気機関車や蒸気船に使用され、綿工業のみにとどまらない産業上の変化をもたらしました。

という知識を題材に、何を教え、どのようなことを学ばせましょうか。ひいてはどのような資質・能力を養いたいですか。私なら、「イギリスで産業革命が始まったのはなぜか」を分析・検討させることで、多角的・多面的な思考力を養うことを念頭におきます。

当たり前を疑う(深堀する) or 分かったつもりを破る

教科書などでは、当たり前のようにイギリスから産業革命が始まったことが書いてありますが、フランスやインドではなぜ世界で最初に起こりえなかったのでしょうか。「なぜイギリスか」について資料を用いて分析・検討すること、もっといえば「批判的に」分析することを生徒にさせたいと思っています。それこそ歴史の授業の本質なのではないでしょうか。

さらに、イギリス特有の理由を見出させたら「産業革命とは何か」について、他国の産業革命を学びながら検討させ、いまなお続く工業化によってどのような正負の側面を生み出したかを考えさせることで、歴史から現在(さらには未来)の社会を見るヒントを得てもらいたいと願っています。

こうした教師の願いを生徒に実現するためにはどのような問いが効果的でしょうか。先生方の授業を通じて学んでもらいたい願いを問いとしてあらわしてみましょう。それが「Eの問い」となっていきます。

私の願いを実現するなら、そもそも産業革命とは何であったかを再検討させることが必要であると思いました。「工業化」とは異なるのか、第4次産業革命とよばれる現在、第1次産業革命とは何であったかを、今一度問い直して生徒に学ばせる必要があるように考えました。では、このような大きな問いを実現するためには具体的に毎時の授業でどのような問いが効果的でしょうか。これを考えるために冒頭で述べた問いだしが効果的だと思います。とにかくブレインストーミング的に書きだしてみることです。

- What 産業革命とは何か？
- When 産業革命はいつ頃起こったか？
- Who 産業革命は誰が起こしたか？
- Why 産業革命はなぜ起こったか？
- Where 産業革命はどこで起こったか？
- How 産業革命はどのようなものか？

動詞を手掛かりに展開！

これらの「問いの形」を基本形に、次に「動詞」を変えていきましょう。

産業革命とは何か、**知っていますか？**

産業革命とは何か、**説明できますか？**

産業革命とは何か、**定義できますか？**

それぞれの動詞の違いにより、答えなければいけない内容が変わるのがわかるのではないのでしょうか。これらの基本形の問い出しができたなら、より具体的な検討をするために、学習内容や教材・教具などを用いて**条件づけ**を行います。

「産業革命はいつごろ起こったか」を例にとると、この問いは産業革命のはじまりをいつごろと考えるかというものなので、イギリス・フランスなどの具体的な地名（＝条件づけ）を加えていきましょう。「イギリスの産業革命はいつごろ起こったか」「フランスの産業革命はいつごろ起こったか」という問いになります。このように、基本形の問いに、条件づけを変えることでより具体性が増します。イギリスでは18世紀半ば、フランスでは1830年代という答えを求めることになります。

では、さらに深めるためには何（What）をもって起点としているか考えさせましょう。「イギリスの産業革命の起点は、何を発明（あるいは普及）したことによってはじまったといえるでしょうか」と問えば、より具体性が高まり生徒にとって難しくなるのではないのでしょうか。

2 書きだした大小の問いがI・C・Eのいずれのフェーズかを考える

「問いの形」を5W1Hでとにかく連想してみる

先ほどの事例で考えるならば、「そもそも、なぜイギリスから『産業革命』がおこったか」という学びを実現するために、
①イギリスで産業革命がおこったのはなぜだろう。
②産業部門における“後進国”であったにもかかわらず、産業革命が生じたのはなぜだろう。
③イギリスで産業革命がおこった、“イギリス特有の理由”とはどのようなものだろう。
と問うています。これらの問いをI・C・Eの各フェーズではどこにあたるか考えます。

このように「問いの形」と「動詞」を変化させることで問い出しをしてみると、このうちどの問いを使うことが効果的なのかについて考えなければいけないことがわかるのではないのでしょうか。

条件を変え、気づきを生みやすく

1時間目の授業では「そもそもなぜイギリスから『産業革命』がおこったか」の目標を達成するために、①「イギリスで産業革命がおこったのはなぜだろう」と問うて背景や要因を知らなければなりません。教科書などを使って学びます。さらに学びを深めるためには「イギリスでは人口が増加した」という要因に対しては、「人口の増加はイギリスのみならず全ヨーロッパ的現象であった」ことを示す資料を提示します。

さらに「イギリスには広大な植民地を有していた」についてはスペイン領のラテンアメリカや中国やインド、ロシアなどの広大な領土を有する国などを示して、イギリスで産業革命がおこった理由は要因論だけでは不十分だと気付かせます。

そのうえで、②「産業部門における“後進国”であったにもかかわらず、産業革命が生じたのはなぜだろう。」と問います。ここから生徒は「イギリスにのみあった特有の理由」があることに着目します。

③「イギリスで産業革命がおこった、“イギリス特有の理由”とはどのようなものだろう」と問うことでこれまで学習してきた重商主義政策を想起させ、現代でも需要の高い物資の国産化をめざす「輸入代替」ということばを知ります。

こうした授業を深めるために配置した問いを資料などの条件を変えることで生徒に気づきを与え、学びを深めさせるようにします。

さらに学びを深める —「転」と「洞察」を促す問い—

特に学びの深まりをつくるためには、「【転】の問い」もしくは「洞察を促す問い」が欠かせません。「驚き」や「矛盾」をつく問いになります。ここでは、「②産業部門における“後進国”であったにもかかわらず、産業革命が生じたのはなぜだろう」が、【転】としてはたらくようにしています。ここが「構造化」を考える際にとっても難しいという声をよく聞きます。しかしながら、問いの形を知っておけば、とても使いやすいものになります。その代表的なものが「〇〇であるにもかかわらず、◆◆なのはなぜだろう」です。疑問詞と接続詞に着

目すると効果的な問いの形が作りやすいので次のステップでやってみましょう。

なお、余談ですが、こうした問いは単元や毎時の授業の軸となるものですが、導入では

①「もし、タイムマシンがあつて過去を旅するとしたら、情景が劇的に変化するのはいつごろからだと思いますか」

②「産業革命って何か、知っていますか」

③「産業革命の定義は何ですか」

④「産業革命って現在では第何次産業革命とよばれているか知っていますか」

などの問いを、**学びの必然性を高めるために使っています。**

3 「疑問詞・接続詞を活用した関係づくり」の表にあてはめて、見直す

ICEの各フェーズにあてはめたら、「C」に着目してどのような効果があるか検討してみましょう。なぜ、「C」に着目するのかといえば、「C」は【つながり】を意味し、「関係性」を作り出すことで、事象を相対化させ、学びを深めることに役

立つからです。特に「疑問詞・接続詞を活用した関係づくり」を考えることで「C」の質が高まり、「E」を考える足掛かりとなります。こうした学びの深まりを見出せるようになってきたら「構造化」を意識できるようになるのだと思います。

■ Cの問いの具体化(例) ～疑問詞・接続詞を活用した関係づくり

	問いかけの意図 (活用できる疑問詞・接続詞)	評価の対象とする内容	具体的な問い
1	本当か、そもそも What	批判的な思考により、与えられた前提を問い直している	<ul style="list-style-type: none"> 各国の産業革命は、どのような特質や課題を有していたのだろうか。 各国における産業革命の進展はいかなる相違点から生じたか。
2	そう言える理由・ 判断の根拠 Why	考えの根拠が示され、考えや論が論理的に関係づいている	<ul style="list-style-type: none"> 日本やロシアにおける産業革命の起点は何だろう。
3	仮定と反事実的推測 If, If not	仮定によって、条件や状況を設定し推量の質を高めている	<ul style="list-style-type: none"> 各国の鉄道の敷設に着目すると産業革命の本格化はいつごろからだろうか
4	～にもかかわらず Even though	異質な考えや矛盾等を取り入れることで、考察をより深めている	<ul style="list-style-type: none"> 産業部門における「後進国」であったにもかかわらず、産業革命が生じたのはなぜだろう。
5	～なら、 ～が言えるだろう If then, If not then	前提に基づいて、新たな解釈や意味を付加したり、その幅を広げたりしている	<ul style="list-style-type: none"> イギリスで産業革命がおこった、「イギリス特有の理由」とはどのようなものだろう。
6	関係性の理解・発見 What ⇄ Why ⇄ How	関係性を理解したり、発見したりすることで、見いだした意味や内容を言語化している	<ul style="list-style-type: none"> 各国における産業革命の「本格化」はいつごろからだろうか。
7	その他		<ul style="list-style-type: none"> 産業革命の影響はどのようなものであろう。 「産業革命」をどのように定義できるか。 「工業化」をどのように定義できるか。